学長コラム

長崎が育てる家族のきずな

昨年十二月に、「長崎大学外国人留学生交流のタベ」が開かれました。英語で言えば"The Year End Party"です。留学生とその家族、それと日頃、留学生がお世話になっている学外の支援者の皆様をお招きして、教職員ともども歓談しました。

留学生はそれぞれのお国の歌や、長崎で学んだ日本舞踊などを披露します。私は大勢の留学生から「学長いっしょに写真をとってください」といわれて、一年で一番もてる日でもあります。

席上、私は二人の留学生から別れの挨拶を受けました。

一人は一昨年一月の学長コラムで紹介した二〇〇一年入学のシェイク・アシフ・アハメド君です。彼はこの三月に大学院博士課程を修了します。「長崎が大好きで、帰りたくないけど、母国パキスタンのネッド大学講師に招聘されたので帰ります」といいます。彼は二年前にメヘウィシさんと結婚、長崎で生まれた一歳の女児マライカちゃんがいます。彼の友人が主催した長崎での披露宴に私は妻とともに招かれました。よい思い出です。

もう一人はバングラデシュから九七年来崎、二〇〇四年に大学院博士課程修了、同年四月から工学部教員のアーメド・サロワロ・ウッデン博士です。ソニア夫人、それと目のクリッとした長崎生まれのラエン君(四歳)がいて、私の妻も良く知っています。

彼も「長崎大学でもっと勉強したい」のですが、両親が年をとってきたのと、ダッカの Independent University の助教授として呼ばれたので帰国することにした」とのことです。

長崎大学で学んだ彼らが母国の大学に招聘されたことは、もちろん彼らの日頃の精進の結果です。が、彼らとその家族は長崎大学で勉強したことを誇りとし、長崎をとても愛していてくれるのが私にとって、そして長崎大学にとっても、何よりも嬉しいことです。

彼らの家族は長崎で育ち、私の家族もまた彼らから多くを学びました。長崎によって、国境を越えた「きずな」とともに、私たちは育てられていると実感します。

彼らと別れることはとても淋しいことですが、大学の使命は人材を育てることです。彼らが母国の大学に招請されて教育研究に携わる人材に育ったことは長崎大学の誇りでなくてなんでしょうか。

彼らに、その昔(一六八九年秋)、長崎生まれの俳人去来が短い帰郷の後、京都に帰るとき日見峠まで見送りに来た長崎の人(卯七)を詠んだ句※「君が手も　まじるなるべし　花薄(はなすすき)」を贈ります。

※訳解「卯七が手を振って見送ってくれる。遠く来て振り向けば、その姿は見えず、ただ山肌を覆う薄が揺れているだけ。でも、あの揺れる薄のどこかで彼は手を振り続けてくれているのだろう」

長崎大学長
齋藤　寛
Saito Hiroshi

追伸：学長メッセージ(http://www.nagasaki-u.ac.jp)にもアクセスしてご意見をください。
メールアドレス：president@ml.nagasaki-u.ac.jp　必ずお返事します。

◎CONTENTS

【特集】 知を求めて いざ、長崎へ
齋藤学長の長崎学…… 1
【環境報告書2005】 環境配慮の大きな潮流をめざして …… 6
【医学は長崎から】 近代西洋医学教育の父ポンペ …… 8
【いいたか放題】 長崎大学名誉教授　高實　康稔さん ……10
【We Love Circle】 ボランティアサークル　バンガーズ……11
【輝く学生生活のために】
学生生活を豊かにする"学園祭" ……12
【留学生のお国自慢】 インドネシア ……12
【長大ニュース】 ……14
【古写真・ひと万華鏡】 髪結い ……16
【インフォメーション】・【編集後記】 ……17

◎本誌記事を長崎大学関係者が転載する場合は、「長崎大学広報誌CHOHO○号から」と明記してください。学外の方は、事前に広報企画委員会までご連絡願います。